

## 溢れる天敵に守られて

徳野 雅仁

夏の自然菜園は、昆虫や小動物が溢れ、オモチャ箱をひっくり返したようなにぎやかさです。これだけの昆虫がいれば、虫害も心配ですが、意外にも作物には被害が見当たりません。どうして虫害が少ないのか、それぞれの虫を注意深く見ていくと、その多くが天敵であることに気づきます。つまり、作物を食べる虫を捕食する昆虫や小動物なのです。クモやハチ類、カマキリ、ナナホシテントウ、ヒメマイマイカブリ、コウガイビル、ムカデ、トカゲ、ヒキガエルはみな天敵で、アリやアブ、カメムシにも虫を捕食する仲間がいます。

オオカマキリが、作物の頂上部などで獲物を待つ姿をよく見かけますが、同じカマキリでもハラビロカマキリは作物の茂みのなかで、コカマキリは地面を歩きながら獲物をさがすというように微妙に棲み分けています。オオカマキリはフ化直後の体長は一センチほどですが、大きく生長する秋口には体長九センチもあるエビガラスズメの幼虫をも捕えて食べ、動くものを追う習性があり、食べ終わるとすぐ次の獲物をさがす大食漢です。

天敵のなかでもクモ類の活躍は見逃せません。葉の裏にうみつけられたヨトウガやモンシロチョウやコナガの卵は、フ化と同時にほとんどクモに食べられてしまいます。雑草があり、敷き草が畝を覆っていれば、クモは増え、虫害防除を一手に引き受けてくれます。クモにはこのように移動し

て獲物を狩るものや、雑草の茂みに網を張ってカメムシやガやオンブバッタなどを捕えるものがあります。クモの活動の舞台は葉の表や茂みのなかですから、その営みを見ることはそれほどむずかしいことはありません。

また、ハチには昆虫を捕食する仲間が多く、ガやチョウの幼虫を狩る達人ぞろいです。とりわけハシリグモを捕食するオオモンクロベッコウは足が速く、逃げるハシリグモを猛スピードで追いかけて、見失うと地上数十センチを旋廻し、隠れている茂みに突入します。それでも分からなくなると突然、目立つ場所にコロッと身を横たえ、手足を痙攣させて死んだふりをして、それを見たハシリグモが安心して草陰から出た瞬間に起き上がって追いかけて、しとめるという頭脳作戦をとります。

攻撃的なシオヤアブは、支柱などの先にとまって周囲を窺い、甲虫やアシナガバチまで捕えて体液を吸います。落葉、雑草の堆積場や、プランターの下にはカタツムリの天敵であるコウガイビルやヒメマイマイカブリが棲み、土中に棲むコガネムシの幼虫やヨトウムシがアリによって地上に引き出され巣に運ばれる場面にはよく出会います。

昆虫や小動物の営みに目を向けてみると、自然菜園は生きものによって守られていることに納得させられます。

(イラストレーター イラストも筆者)



コガネムシの幼虫を穴から引き出して巣に運ぶアリ